少年時代

函館市医師会
函館市医師会病院　　山　科　哲　朗

私は昭和31年に道北の下川町で生まれ、その後、勤務医であった父の赴任に伴い、家族は道内各地を２年から３年おきに転居し、７歳の時に札幌に移り住みました。そして大学を卒業するまで居住は札幌でした。

当時でも札幌の人口は約70万の大都市でしたが、郊外にはまだまだ豊かな自然が多く残っており、大変に魅力的な街でした。私は幼少時から昆虫に興味を持ち、クワガタやキリギリスを採集してきては自宅で飼育し、その餌の調達と飼育箱の置き場所でいつも母親を困らせていました。その後、本格的に昆虫（蝶）採集に目覚めたのは、10歳時に祖母に高価な捕虫網を買ってもらってからでした。

そしてその時から、私は少年ながら一端の“蝶採集家”になりました。

自宅から市内の円山公園には自転車で30分ほどの距離であり、毎週のように蝶採集に出かけました。当時の円山公園は自然にあふれ、私が見つけた秘密の蝶採集ポイントが数多くありました。また、まれに日本の国蝶に指定されているオオムラサキが樹上高く力強く飛翔する姿を確認し、憧れを持って見ていたのも覚えています。そして蝶採集の情熱はますます高まり、採集範囲は拡がり、盤渓、藻岩山、さらには定山渓、豊平峡そして神居古潭、大雪山にまで出かけるようになりました。早春の神居古潭で見たカタクリの花に集まる北海道特産のヒメギフチョウが舞う姿は、美しく正に“春の女神”でした。

当時私は著名な蝶学者・白水　隆博士著の“日本の蝶”という専門的な原色図鑑を母にねだって買ってもらい、いつも枕元に置いていました。毎晩寝る前に図鑑を見ては、いつか自分の手でまだ見ぬ蝶を採集することを夢見ていました。当時を想い起こすと、すべてが平穏で将来に対する不安もなく、家族に見守られた幸せな毎日でした。

その後も蝶採集は続きましたが、大学入学後は徐々にその情熱は冷めていきました。日本全国で都市人口増加に伴う森林伐採や宅地造成が進み、またダム建設で山谷は水没し、蝶の生息地である緑の美しい自然が急速に失われていきました。さらに乱獲のため稀種は絶滅に瀕してしまいました。そのため、いくら魅惑的でも個体数が著しく減少した蝶を採集することに後ろめたさが出てきました。

長い中断の後、最後に私が捕虫網を握ったのは、約20年前に家族旅行で沖縄を訪れ、西表島で当時10歳の息子に蝶採集の手本を見せた時でした。今では少年時代に愛用したつなぎ竿の捕虫網は、部屋の片隅に無造作に置かれています。

“少年時代”とは何と魅惑的な時代でしょう。

今年、年男で還暦を迎える私にとって、最も鮮やかに想い出される時間は、遠く過ぎ去った少年時代です。

多くの友人に恵まれ、毎日汗まみれになるまで遊び、一心不乱に蝶を追いかけ夕暮れに自宅に戻り兄弟、両親と一緒に夕食を取るという平凡な日々でしたがいつも新鮮でした。しかし今となっては、もう純粋無垢であったあのころの少年時代に戻ることはできません。過去の憧憬に想いを巡らせていてばかりでは前には進めないのです。

私にはまだもう少し時間があります。そのためあとひと踏ん張りしたいと思っています。

昭和40年　初版
白水　隆 著
原色圖鑑
日本の蝶

50年経過した現在でもその写真は大変に鮮やかで、輝きは失われていません。